

王権と君主の「ルネサンス」：ヘンリ・ステュアートと統治のアート

木村, 俊道
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/4705303>

出版情報：法政研究. 88 (2), pp.71-104, 2021-10-15. Hosei Gakkai (Institute for Law and Politics) Kyushu University

バージョン：

権利関係：

王権と君主の「ルネサンス」

——ヘンリ・ステュアートと統治のアート

木
村
俊
道

はじめに

第一章 「宮廷のカレッジ」——ヘンリの君主教育

第二章 叙任式と仮面劇

第三章 エンブレム

第四章 歴史と統治のアート

おわりに

はじめに

一七世紀のブリテン、とくにジェイムズ六世・一世とチャールズ一世が統治した初期ステュアート朝の時代はかつて、絶対君主と議会との対立が激化し、内乱や革命へと至る前史とされてきた。しかし、イギリス史学における修正主義や近年の複合国家論、あるいは文学史や文化史などの成果により、絶対主義や市民革命に還元されない、シェイクスピアも活躍した彩り豊かな時代の様相が明らかになりつつある^①。なかでも、ジェイムズについては再評価が進み、王権神授説に依拠して権力を恣意的に行使する暴君といったステレオタイプとは異なる、「ブリテン」という複合国家の統治を担った君主の姿が描かれるようになって^②。

もつとも、デモクラシーや自由、近年では共和主義や市民的公共圏などへ関心を向けてきた政治思想史研究の分野では、少なくとも国内ではまだ、このようなリヴィジョンは充分に進んでいないように思える。これに対して、本稿では、同時代のブリテンにおける王権と君主政、あるいはモナーキズムや宮廷文化の思想的な意義に着目したい^③。デモクラシーや共和政とは異なり、王権や君主政は、古代エジプトや古代中国などにも遡る歴史を有するだけでなく、少なくとも二〇世紀初頭までの諸国家の常態であり、多くの人々の意識を強く引き付けていた^④。その意味で、(イングランドからすれば外国人王朝である)ステュアート朝への王朝交代だけでなく、内乱と革命を経てもなお、世襲の王権と君主政を維持した一七世紀ブリテンの経験は、モナーキズムの思想的な持続力や強靱さを理解するうえでも見逃せないのである。

とはいえ、内乱前の初期ステュアート朝においても、ジェイムズから息子のチャールズへの王位継承は歴史の必然であった訳ではない。なぜなら、ジェイムズにはチャールズだけでなく、実は、わずか一八歳で夭折した長子のヘンリがいたのである(図一)。ロイ・ストロングの研究をはじめとして、この皇太子ヘンリの宮廷は、とくにルネサンス期

の文芸や芸術の受容といった観点から関心を向けられてきた。近年ではまた、ポルニッツによって、ヘンリを含めた同時代の君主教育研究に厚みが増えられている。しかし、一般的な通史、ましてや政治思想史研究において、この「失われたプリンス」の存在はほとんど言及されることはない。ところが、以下で示すように、一六世紀中葉のエドワード皇太子(のち六世)以来、イングランドにおいては半世紀以上絶えていた男子継承者の存在は、ジェイムズの『パシリコン・ドロン』をはじめとする、理想の君主をめぐる多くの言説を惹き起こした。将来の「ヘンリ九世」を名宛人としたこれらの議論は、それゆえに、一定以上の実現可能性が期待されるリアルな「理想」論となったのである。

以上のような関心から、本稿では、皇太子ヘンリをめぐる君主論と統治論の展開とともに、一七世紀ブリテンにおけるモナーキズムの一つの点景を描くことを目指す。そのために本稿では、ヘンリやジェイムズ、あるいはウィリアム・ファウラーやソールズベリー伯といった側近や重臣だけでなく、ベン・ジョンソンやヘンリ・ピーチャム、ジョン・ハイワード、ロバート・ダーリントン、そしてフランシス・ベイコンなどの、ヘンリの宮廷を中心とした劇作家や詩人、教師、歴史家、宮廷人、哲学者といった知的エリート作品群を対象に含める。このような作業からはまた、「偉大な著者」や「正典」からは必ずしも見えてこない、同時代における政治思想の集合的な図柄が見えてくるであろう。しかも、そこにはまた、ジェイムズやチャールズとはまた別の、それゆえに一定の緊張を内包した王権と君主のヴィジョンが描かれていたのではないか。

ヘンリは実際に、スペインと和平した「平和の君主」*Rex Pacificus*、あるいは「学識ある」君主とも評された父ジェイムズとは異なる、戦闘的なプロテスタント君主になりうる存在として内外の期待を広く集めた。もともと、以下の各



図1 皇太子ヘンリの肖像画
Isaac Oliver, c.1610-12

章ではとくに、ヘンリをめぐる君主論のなかでも、建国者ブルータスやアーサー王にまつわるブリテンの伝説や中世以来の騎士道の理念、そして古典や歴史の教養に育まれたルネサンス期の人文主義と統治技術論の再生産の過程に注目したい。本稿ではまた、各種の儀式や式典（第一、二章）、仮面劇（第二章）、エンブレム（第三章）、あるいはアフォリズム（第四章）といった、政治思想史の素材として通常は扱われない、視覚的・言語的なアートの役割が強調される^⑩。なぜなら、モナーキズムの一つの強み（あるいは弱み）は、抽象的な哲学や理論よりはむしろ、これらの多彩なアートを通じて人々の感覚や感情、あるいは想像力に働きかける点にあったと考えられるからである。

とはいえ、王朝の交代や王位の継承は常に秩序の流動化や不安定化、さらには内乱の危険を孕んでいた^⑪。王家の内紛は歴史の常である。しかも、イングランドにおいてはとくに、幼少君主（エドワード六世）と女性君主（メアリー一世、エリザベス一世）が続き、それまでのテューダー朝が断絶した結果、ジェイムズという外国人君主をスコットランドから迎えるに至った。そして、それゆえにこそ、王朝や王家を安定的に維持し、一定の人文主義的な教養を有する君主を継続的に「再生」させることは、ルネサンス以降の王権にとって最重要の政治課題の一つとなる。その意味で、皇太子ヘンリをめぐる政治思想の展開には、君主政を常態とする時代の絵柄とともに、ジェイムズからチャールズに至る、初期ステュアート朝における一つの「統治のアート」が隠されているのではないか^⑫。

第一章 「宮廷のカレッジ」——ヘンリの君主教育

ヘンリ・フレデリック・ステュアートは、一五九四年二月一九日、スコットランド国王ジェイムズ六世と王妃アンの長男として生まれた。それと同時に、イングランドとの関係を見据えてヘンリを将来の「ブリテン」の君主とするためのプログラムが開始されたが、なかでも、八月三〇日にスターリング城で催された洗礼式は見逃せない^⑬。なぜなら、こ

の洗礼式を含む一連の催事には、スコットランド国内の貴族や頭官、高位聖職者だけでなく、イングランドやデンマーク、低地諸国などから派遣された大使も参列していたからである。とくに、イングランド特命大使のサセックス伯は、ヘンリーの名付け親となったイングラント女王エリザベス一世の代理として重要な役割を担った。というのも、洗礼に際して幼子のヘンリーは、ヘラクレスの物語が描かれた寝台から、スコットランド貴族のレノックス公とサセックスの手を経て、「参加が予定される大人数の外国人を楽しませるために」新たに作り直されたチャペル・ロイヤルへと運ばれたのである。¹⁴

このように、ヘンリーの洗礼式は対内的な融和を促進することに加え、国際社会、とくにイングランドに対して彼を将来の君主として認知させるための「政治的なアート」¹⁵(パワーズ)でもあった。それゆえ、この洗礼式の模様を記した小冊子が、ジェイムズの側近で王妃アンの秘書であるウイリアム・ファウラーによって作成され、同年にエディンバラとロンドンで出版されるだけでなく、ジェイムズがイングラント王として即位した一六〇三年にも版を重ねたのである。また、以下の議論との関連でさらに触れるべきは、この式の実施を任されたファウラーが、詩やエンブレムなどを創作し、ペトラルカの寓意詩集『トリオンフィ』を翻訳するなどした人文主義者でもあったことであろう。しかも、ファウラーはまた、出版はしなかったものの、マキアヴェッリの『君主論』の翻訳も手掛けていたのである。¹⁶

もともと、ヘンリーの君主教育において最も重要な指針となったのは、当時から大きな非難を浴びていたマキアヴェッリではなく、「学識ある」ジェイムズの「君主論」であった。ギリシア語で「王の贈り物」を意味し、「完全な王」になるための模範や教訓が説かれた彼の『バシリコン・ドロン』は、一五九九年に七部のみ印刷され、ヘンリーに献呈された。ジェイムズは、古代のアレクサンドロス大王とホメロスの『イリアス』との関係になぞらえ、この作品がヘンリーに対する「正しく公平な助言者」となることを望んだのである。¹⁷『バシリコン・ドロン』はまた、一六〇三年にロンドンでも再版されてベストセラーとなり、まだ幼い将来の王の教育方針はイングランドでも広く知られることとなる。しかも、

ジェイムズは新たにイングリランド王としてロンドンに向かう際に、二つの王冠の統合という慶事が「貴方を増長させ、傲慢にさせないように」とヘンリに助言する。そして、「すべてのイングリランド人」を「愛すべき臣民」とみなすことを説いたこの手紙のなかで、新君主ジェイムズは改めて「最近印刷された私の本」を精読するように求めたのである。¹⁸⁾

ヘンリの君主教育は実際に、とくにイングリランドに移ってからは家庭教師のトマス・チャロナーや古典語学者であるアダム・ニュートンらを中心に行われた。¹⁹⁾ しかも、ヘンリの宮廷には第三代エセックス伯や克蘭ポーン卿ウィリアム・セシル、エクストンのジョン・ハリントンといった貴紳

の子弟が多く集まり(図2)、チャロナーによれば、さながら「宮廷のカレッジ」もしくは「カレッジのような宮廷」となっていた。²⁰⁾ また、ハリントンの家庭教師であったジョン・クリーランドの『若い貴族の学院』(一六〇七)によれば、それはまた「グレイト・ブリテンの真のパンテオン」であり、若い貴族が後に枢密顧問官や將軍となって「平時に支配し、戦時に指揮する」るための「初歩」を学ぶことができる「アカデミー」であった。彼らの関係は、あたかもヘラクレレスとヒレス、アキレウスとパトロクロス、アレクサンドロスとヘファイスティオンのように見なされたのである。²¹⁾

さて、ジェイムズの『バシリコン・ドロン』によれば、君主の徳として、何よりも「民衆を支配する」ための「すべての技 crafts」をよく学ぶことが求められる。しかも、「すべての術と学 Arts and sciences」は相互に関連しているため、それらに共通する「偉大な諸原理」を理解することが大事である。²²⁾ そして、なかでも重要視されたのが聖書と法、そして歴史を学ぶことであった。その結果、たとえばピーチャムの『ブリテンのミネルヴァ』(一六一二)によれば、ヘンリは「すべての善き学問と卓越したもの」に対する「王者としての広い度量」を有することになったとされる。²³⁾ もっと



図2 ヘンリと第3代エセックス伯 Robert Peak, c.1605

も、その一方で、ヘンリがより強い関心を向けたのは身体的な武芸や競技であった。たとえばベイコンによれば、ヘンリは「古事や諸芸 antiquitatis et artium」を好んでいたが、「文芸 *litteris* には時間を費やすというよりは敬意を払ってゐた」のである⁽²⁴⁾。彼は実際に「一日の二時間」を学習にあてる一方で、その他は槍術や高跳、弓射、投擲などの練習に割いており、とりわけ乗馬を愛好していた⁽²⁵⁾。それゆえ、ヴェネツィア大使の報告によれば、ジェイムズはある日、当時一二歳のヘンリに対して「もつと熱心にレッスンを受けなければ、王冠は弟のヨーク公に移るであろう」との苦言を呈した。その後、同様のことを教師から言われたヘンリは、「何が君主にふさわしいかを私は知って」おり、「自分に必要なのは教授になるのではなく、兵士となり世間に通じることである」と述べたとも伝えられている⁽²⁶⁾。

このように文武をもとに好んでいた(とされる)ヘンリの宮廷は、スペインと和平したジェイムズとは異なる一つの拠点として、「プロテスタント世界」の「すべての眼や心」⁽²⁷⁾、あるいはエリザベス期から続く好戦的な言説を惹きつけるとともに、多くの知的エリートへの期待を集めることとなる。ヘンリは実際に、短い生涯の間に百十もの出版物を献呈されるなど、文化的なパトロンとしての役割も果たしていた⁽²⁸⁾。たとえば、ホメロスを「詩人のプリンス」と呼んだジョージ・チャップマンは、『イリアス』の翻訳(二六〇九、一一)と『ホメロス全集』(一六一六)をヘンリに献呈した⁽²⁹⁾。また、詩人のマイケル・ドレイトンは、『ボリ・オルビオン』(一六一二)の冒頭での献辞に続けて、ブリテンの「最高の希望」にして「世界の喜び」であり、スコットランドやアイルランドを加えた「三つの邦」を支配する将来の「ヘンリ九世」を称えるとともに、武装して槍を構えるヘンリの版画を掲載したのである(図3)⁽³⁰⁾。そして、ロンドン塔に幽閉されていたウォルター・ローリも、海軍や軍事、植民政策への関心、そして反カトリック・反スペインなどの点で共鳴するヘンリに期



図3 武装して槍を構えるヘンリ・オルビオン版より

待を寄せた。獄中でのローリの執筆活動は、「キリスト教世界でもっとも偉大な一人」であるヘンリへの「奉仕」が一つの動機であり、それゆえ、ヘンリの死後に出版された『世界史』（二六一四）は、ローリによれば「主人のいない世界に取り残された」のである。³²⁾

第二章 叙任式と仮面劇

こうして、ヘンリが成長するにつれて、彼を伝説の英雄（ヘラクレス、アキレウス、アレクサンドロス）やプロテスタントの盟主として単に称えるだけでなく、模範的な君主像や統治の技術をさらに踏み込んで助言する多くの言説が展開されることとなる。たとえば、伝統的な「君主の鑑」論と同様に倫理的な徳や民衆への配慮を強調した作品として、ジェイムズの『バシリコン・ドロン』の他にも、ヘンリに献呈されたジョージ・モアの『若き君主のための諸原理』（一六一一）が挙げられる。そのなかでモアは、正義や信義、行動の一貫性や鷹揚などを主張する一方で、「王的・政治的統治 Regal and politicke government」においては民衆の意思に反した法の改変や財産の没収などはできないことを指摘する。しかも、彼はこのことを、建国者ブルータスの伝説や、王と暴君を区別したプルタルコスPlutarchの議論を用いて強化した。³³⁾そして、ジェイムズもまた、王と暴君の違いや君主の責務の大きさを強調しつつ、『バシリコン・ドロン』の末尾において、ウエルギリウスの『アエネーイス』を引用しながら、かつてのローマ帝国の支配を可能にしたような統治のアートに卓越する必要を説いたのである。³⁴⁾

もっとも、先にも述べたように、デモクラシーや共和政に比べ、王権や君主政をめぐる言説においては、人間の理性や抽象的・体系的な理論よりも、人間の感覚や感情、あるいは想像力に訴える傾向が強くなるように思われる。しかも、ジェイムズによれば、君主は「公的な人格」であり、「公的な舞台」において「すべての人々の視線」を浴びてい

る。⁽³⁵⁾それゆえ、以下の各章で述べるように、ヘンリをめぐる君主論や統治論は、学問的な著作だけでなく、先に見た洗
 礼式などの式典や仮面劇、エンブレム、アフォリズムといった多彩な形式を通じて表象されることになる。

こうしたなか、一六一〇年六月四日、ヘンリに「プリンス・オブ・ウェールズ」の称号を与える叙任式が議会で行われ、⁽³⁶⁾その一連の過程において、ヘンリは実際に「公的な人格」として「すべての人々の視線」を集めることになる。当時の記述によれば、式に先立ってリッチモンド宮殿から船で移動するにあたり、彼は、ロンドン市による「贅を尽くした」水上行列で迎えられた。また、テムズ川は見物のボートで埋まり、兩岸には「数限りない民衆」が詰めかけ、彼がホワイトホール宮殿に到着すると「雷鳴のような歓声が空に上がり」、「民衆の心の喜び」が示されたという。⁽³⁷⁾そして、ウエストミンスターにおける式の当日には、両院の議員だけでなく、スコットランドとアイルランドの貴族、ロンドンの市長や参事会員、そして各国の大使らも参列していたのである。

このような「公的な舞台」に臨むにあたり、ヘンリは自ら、過去の皇太子の歩みを「模倣し、踏襲する」ことを強く望み、臣下に先例の調査を行わせていた。⁽³⁸⁾そのうえで、一五〇四年以来、百年以上行われていなかった儀式を復活させるにあたって中心的な役割を果たしたのが、ソールズベリー伯ロバート・セシルである。⁽³⁹⁾秘書長官に加えて大蔵卿を兼ねていた彼は当時、深刻な財政問題を抱えた王権と議会の調整という難題を抱えながら、ヘンリの政治教育にも関与していた。実際に彼は、諸外国からの大使の報告書をヘンリにも送り、「アリストテレスやキケロよりも、それらを毎日読む方がブリテンの皇太子にはより適しているであろう」とも述べている。⁽⁴⁰⁾それゆえ、議会での叙任式の実施には、ソールズベリーの高度な政治的・教育的意図が幾重にも織り込まれていた。すなわち、それは一方で、「プリンス・オブ・ウェールズ」という「公的な人格」を「すべての人々の視線」を集めた「公的な舞台」に立たせ、歴史ある王権の正統な継承者であることを示すとともに、緊張関係にある王権と議会、スコットランドやアイルランド、ロンドン、そして諸外国との融和を図るものであった。しかも、それはまた、ヘンリに実際の「権力の絵巻」(クロフト)を見せる政治

教育の機会でもあったのである。⁽⁴¹⁾

もともと、この叙任式そのものや、当日の夜にサミュエル・ダニエルの仮面劇『テューレスの祝祭』が上演されたことにも示されるように、当時はリアルな権力政治の傍らで式典や祝祭、パジェント、馬上槍試合、仮面舞踏会などのエンターテイメントが頻繁に繰り広げられていた。⁽⁴²⁾ ヘンリは「公的な舞台」に立つだけでなく、実際に、華やかな仮構の世界に取り囲まれていたのである。そして、なかでも、初期ステュアート朝における王権の演出に大きく寄与したのが宮廷の仮面劇であり、その中心的な人物の一人が劇作家のベン・ジョンソンであった。しかも、のちに「イングランドのホラティウス」とも呼ばれた彼の戯曲の特徴は、古代ローマを舞台にした『似非詩人』（上演一六〇一、出版一六〇二）や『シジェイナス』（上演一六〇三、出版一六〇六）にも見られるように、人文主義的な教養が駆使されることにある。そのうえで彼は、ジェイムズの即位を記念した一六〇四年三月一五日の入市式において、「ブリテン君主国」の誕生やローマ皇帝アウグストゥスの再来を祝う凱旋門やスピーチを考案し、⁽⁴³⁾ ジェイムズに重用された。それ以降、ジョンソンは仮面劇などを通じてジェイムズやヘンリ、あるいはチャールズに対する助言を試みるとともに、王室の建築監督官となるイニゴ・ジョーンズの助力を得てステュアート王権の思想を言語化・視覚化することになる。⁽⁴⁴⁾

こうしたなか、ヘンリはすでに一六〇三年六月、エディンバラを出発してロンドンに至る途中のオールソープでジョンソンの劇を献呈されていた。その後、ヘンリは仮面劇に強い関心を示し、劇中に自ら登場するだけでなく、公演の企画にも関与することになる。このことは一方で、先にも示したような学問や文芸、あるいは人文学に対するヘンリの興味や理解の深さを示しているだろう。それゆえ、たとえば一六〇九年二月二日にホワイトホールで上演された『女王の仮面劇』について彼は、ホラティウスの『詩論』などの、この作品で参照された文献を示すようにジョンソンに求めた。そして、これに応えてジョンソンは、ヘンリが「人文学 humanity と名のついでに文芸 letters や高尚な学問」を「愛好」していることを褒め称えたのである。⁽⁴⁵⁾

もつとも、このような人文主義的な教養に裏打ちされたジョンソンの仮面劇には一方で、ジェイムズとヘンリに象徴される二つの統治のヴィジョンの緊張が見られた。⁽⁷⁾すなわち、ヘンリの関心は他方で、仮面劇を通じてブリテンの伝説と騎士道の復活を図るとともに、戦うプロテスタントのプリンスとしての姿を示すことであつたのである。それゆえ、一六一〇年の一月六日(一二夜)にホワイトホールで催されたジョンソン作の『ヘンリ王子の槍試合』では、アーサー王の伝説をもとに騎士道の復活が唱えられ、上演に合わせて行われた槍試合にはヘンリも自ら参加したのである。⁽⁸⁾また、「プリンス・オブ・ウエールズ」に叙せられた後の一六一一年一月一日には、同様にホワイトホールにおいて『オペロン』が上演された。そして、「妖精のプリンス」を副題とする『オペロン』では、ヘンリは自らダンサーとして舞台上がるとともに、シェイクスピアの『夏の夜の夢』(一六〇〇)にも登場する妖精王オペロンに擬せられたのである。⁽⁹⁾

その一方で、これらの仮面劇においては、舞台芸術を担当したジョーンズによって「妖精のプリンス」オペロンがローマ皇帝のような衣装を纏い(図4)、各シーンにおいて古典的な意匠の背景が組まれるなど、人文主義的なテーマも随所に編み込まれていた。⁽¹⁰⁾また、とりわけ見逃せないのは、『ヘンリ王子の槍試合』において、ジェイムズによるブリテン統合のヴィジョンが示されるとともに、それを統治する君主の模範や技術が示されていたことであろう。しかも、この「文治のアーツ」Civilitasは軍事に先んじるとされ、騎士道の栄光や名誉とは対照的に、日常的な法や交易、平和を志向するものであつた。そして、歴代のイングランドの君主が「模範」として称えられるなかで、「貴方の思想が飛翔する高み」とされたのがジェイムズであつたのである。劇の登場人物の魔術師マーリンによれば、この「統治の仕方



図4 オペロンの衣装
Inigo Jones, 1611

知る」ジェイムズのもとで、イングランドとスコットランドが結ばれ、アイルランドが征服され、制海権が復活した。すなわち、「諸王国は混じりあい、国民はつながり、帝国の力は固められた」のである。⁽⁵¹⁾

第三章 エンブレム

このように、『バシリコン・ドロン』をはじめ、人文主義やブリテンの伝説、騎士道といった複数の言説によって語られた「プリンス」の理想は、その内部に緊張を抱えつつも、宮廷や議会といった「公的な舞台」の上で彩り豊かに視覚化された。ベイコンによれば、「思想はかならず語を媒介として表現されねばならぬというわけではない」⁽⁵²⁾のである。以下では、ヘンリーの君主教育において複数のヴィジョンを伝える多様なアートが駆使されていたもう一つの例として、「ヘンリーの宮廷を取り巻く文化的な熱意を忠実に代表する」とも評されるヘンリー・ピーチャムと、とくに『ブリテンのミネルヴァ』(二六二二)をはじめとする彼のエンブレム集に着目してみたい。

ピーチャムは、ケンブリッジ大学を卒業した後、グラマースクールの教師を務める一方で音楽の素養や大陸旅行の経験も有した人文主義者であり、同時代の代表的な教育書である『完全なジェントルマン』(一六二二)の作者としても知られている。⁽⁵³⁾その後も版を重ねた(二六二七、三四、六一)この作品において彼は、「すべての助言と指導の源泉」は「善き学問の知識」であるなどとして、君主や貴族に学問が必要なことを強調した。⁽⁵⁴⁾彼はまた、プルタルコスに加え、エラスムス、ヴィヴェス、あるいはエリオットやアスカムといったルネサンス期の代表的な教育書を一方で意識しつつ、他国と比べてイングランドの教育が「粗野で遅れている」ことの問題を指摘し、「無知の時代の暴政」をなくすことを目指したのである。⁽⁵⁵⁾そして、「完全なジェントルマン」の成型に必要な学問としてピーチャムが挙げたのが、話し方や書き方、歴史、天文、地理、幾何、詩文、音楽、図画、紋章、体育、振舞、旅行などであった。⁽⁵⁷⁾

このなかで、言語に関するアートについて、たとえば詩については、それが「最初の哲学」であり、人の心を動かし、野蠻を文明(シヴィリテイ)へと変える力を有しているといった、同時代に広く共有されていた議論が繰り返されている⁽⁵⁸⁾。また、この詩文に加え、キケロを模範とする雄弁も高く評価される。ピーチャムによれば、雄弁は悪用の危険があるものの、これもまた、詩と同じく野蠻から文明をもたらすものであり、「悪い風俗を正し、法を改革し、野望を抑え、すべての美德を支える主要な手段」である。それゆえ、君主には、「国家を支える柱」であり「乱れたコモンウェルスに調和をもたらす唯一の鍵」である雄弁家を登用することが求められるのである。そして、実際に雄弁に優れていた顧問官として挙げられたのが、ベイコンの父ニコラスやソールズベリーの父パーリ卿ウィリアム・セシルであった⁽⁵⁹⁾。

もつとも、ジェントルマンに必要なアートとして、とくにピーチャムが得意としたのは絵画であった。それゆえ、彼は『絵画の技術』(二六〇六、〇七)、『描画法』(一六一二)、『ジェントルマンの習練』(一六一二、三四、六一)を著すこととなる。繰り返し増補されたこれらの作品のなかで、彼は具体的な画法に加えて、図画の卓越性や歴史の古さ、過去の高い評価、有用性、必要性を主張する。その際、彼が繰り返し言及したのが、文法や体育、音楽とともに図画を「よく統治された都市やコモンウェルス」における初等教育の主要な教養科目としたアリストテレスの『政治学』であった⁽⁶⁰⁾。ピーチャムはまた、画力が娯楽のためだけでなく、数学や軍事といった他のアートとも深く関連し、図面や城塞の様子、市街、港湾などの位置、河川の流路、森や沼地や岩山などを通る道筋、あるいは外国での観察対象などを描くために欠かせないことを指摘する⁽⁶¹⁾。実際に彼は、「陛下を真に描いた絵」がないことに驚きを示しつつ、宮廷のなかでジェームズを何度も観察し、「一時間」でそのスケッチを描き上げたという⁽⁶²⁾。

ピーチャムの『プリテンのミネルヴァ』は、以上のような文明化されたコモンウェルスを支える言語と図画のアートが複合的に用いられたエンブレム集であった。ここで言うエンブレムとは、広義には寓意画を意味するが、狭義にはモットーと図像、エピグラム(短詩)の組み合わせによって一般的な真理や道徳を伝達する表現形式を指す(これに関

連して、個人の信条などをモットーと図像で示したものはインブレーサ、もしくは英語でデイヴァイスと呼ばれるが、常に厳密に使い分けられている訳ではない。⁽⁶⁵⁾ このエンブレムは、「詩は絵のごとく」とする古代ギリシアのシモニデスやホラティウスなどの詩論を背景とし、⁽⁶⁴⁾ ミラノ出身の人文主義者・法学者のアルチャーティによる『エンブレム集』(二五三)を嚆矢として一六世紀以降のヨーロッパで広く用いられた。そして、イングランドでも一七〇〇年までに五〇冊以上のエンブレム・ブックが出版されたが、その初期の代表的な作品の一つが『ブリテンのミネルヴァ』であった。⁽⁶⁶⁾

ピーチャムは、「英雄的デイヴァイスの庭園」を副題とし、二〇七のエンブレムを収録した『ブリテンのミネルヴァ』を、「すべての善き学問と卓越したもの」に対する「王者としての広い度量」を示すヘンリに献呈した。⁽⁶⁶⁾ また、「著者の結論」と題された巻末

の詩文においては、ブリテン帝国とそれを支える騎士道のヴィジョンが、イングランドとスコットランド、アイルランドの三つの王笏を手にする「鳥々の女帝」の姿を通じて提示される。しかも、この詩のなかではまた、ホワイトホールに実際にあった盾のギャラリーと同様に、「鳥々の女帝」の傍らにある木々に「彼女の征服事業におけるアクター」である「すべての立派な騎士」の「銀の盾」が掛けられている光景が、あたかも「絵のごとく」描写されたのである。⁽⁶⁷⁾

こうして、『ブリテンのミネルヴァ』には実際に、ジェイムズやヘンリといった王族に加え、ソールズベリーなどの重臣やベイコンを含めた高官、学友のハリントン、そしてチャロナーやニュートンといったヘンリの家臣を含むブリテンの「騎士」のエンブレムも掲げられたが、それらはまた、同時代における多様な政治思想の展開を可視化したものでもあった。たとえば、「グレイト・ブリテンの王」としてのジェイムズは、王権神授説を図像化した天から差し出された王冠(図5)や、イングランドとスコットランドの二匹のライオン、病を退治するドラゴン、都市を守る落とし格子



図5 王権神授説の寓意画
Peacham, *Minerva Britanna*, p. 1.

レムは知的な想念を、感覚的な映像にかえてしまっているのであるが、このほうがいつそう記憶に残る⁽⁷⁰⁾のである。また、モットーやエピグラムには、人文主義的な教養を前提とした、いわば本歌取りのような引用の技法が重層的に用いられていた。たとえば、ヘンリーの雄飛を馬上の騎士として視覚化した先のエンブレムでは、プルタルコス⁽⁷¹⁾の「アレクサンドロス大王伝」に由来する「ブリテンにはお前の居場所はない」というモットーがギリシア語で掲げられるとともに、アレクサンドロスのように乗馬に優れることを求めたジェイムズの『バシリコン・ドロン』の一節がラテン語に訳され、併せて参照されていたのである⁽⁷²⁾。

このような君主教育の観点からさらに注目されるのは、ピーチャムが『ブリテンのミネルヴァ』とは別に、この『バシリコン・ドロン』を基にしたエンブレム集の草稿を複数作成していたことであろう⁽⁷³⁾。なかでも、ヘンリーが一六一〇年にプリンス・オブ・ウェールズの称号を得た際に作成された草稿(以下 MS Royal と表記)は、鮮やかな彩色がなされ

17 TO THE MOST RENOWNED, AND
Hopefull, HENRIE Prince of WALES, &c.
Βασιλεὺς ἀσπαστῆ.
HENRICVS Wallis Principi,
Für Achillis, Für eine schütz.



THVS, thus young HENRY, the Macedon's Sonne,
Ought' it should in armes before thy people shine,
A prodige for thee to gaze vpon,
But still a glorious Lord-stare vnto thine:
Or second PHOENIX whose all piercing ray,
Shall cheare our hartes, and chafe our steeres away.

* Minerva A. That (once as PHILIP) JAMES may fay of thee,
Thy BRITAINS scarce could thy courage hold,
That whether TURKS, SPAINES, FRANCKES, OR ITALIES,
The RED-SHANKES, or the IRISH Rebels bold,
Shall rouse thee vp, thy Trophies may be more,
Then all the ARMIES ever liu'd before.

Malle na vincto deus, pro alia paratore. Finibus Hispan, quo Turca, scellit liberos
Abstulit a turca confilicudo nisi: Finibus togo line finibus leges. Et corpore

図6 ヘンリーのエンブレム
Peacham, *Minerva Britanna*, p. 17.

などで表象された⁽⁶⁸⁾。そして、ヘンリーは槍を持った馬上の騎士として描かれる。しかも、この図像に付されたエピグラムにおいては、荒馬を乗りこなし、版図を拡張したアレクサンドロスと同様に、ヘンリーがトルコやスペイン、フランス、イタリア、そしてスコットランドのハイランダーやアイerlandの叛徒に対してブリテンの勇武を示すことが謳われたのである(図6)⁽⁶⁹⁾。

これらのエンブレムにはまた、政治的なヴィジョンを示すだけでなく、教育という面からも、言語と図像による高い相乗効果が期待された。たとえばベイコンによれば、「エンブ

ているだけでなく、実際にヘンリに贈られたことでも見逃せない。そのヘンリ宛の献辞によれば、エンブレムは古くからヘロドトスやプリニウス、そしてアリストテレスを含む多くの古代人によって用いられ、エジプトのヒエログリフ、ローマの神殿や劇場などにも広く見られた。それはまた、花や魚や木といった動植物を様々な徳目の象徴にすることによって、自然哲学の知識だけでなく、文明的な国家 *civilem politiam* や人間的な生活に関する道徳哲学をもとに開示する。それゆえ、ピーチャムによる『バシリコン・ドロン』のエンブレム集もまた、視覚や文章の効果などによって、キリスト教の教えだけでなく、国政の基礎や善き生活をより確かにするものとして献呈されたのである。⁽⁷⁴⁾

こうして、MS Royal には『バシリコン・ドロン』の内容を「感覚的な映像」へと変換した七八のエンブレムが収録されることになる。たとえば、『ブリテンのミネルヴァ』にも掲載された神授の王冠が二本の鎖で吊るされている様子は、神に対する人間としての義務、そして人間を支配する「小さな神」としての義務を説いた『バシリコン・ドロン』の冒頭の議論を図案化したものである。⁽⁷⁵⁾ また、点灯したロウソクによって君主が民衆の模範であることが示され、ハエのたかるローマ皇帝ドミティアヌスの墓の図像によって暴君の悲惨さが強調された。加えて、人間の有為転変と歴史の教訓は運命の輪によって、リベラル・アーツを適度に学ぶべきことは計測用の道具を手にした学者の姿によって視覚化される。そして、『バシリコン・ドロン』の末尾でウエルギリウスの『アエネーイス』の一句を通じて語られた、ブリテンを支配する「アート」に卓越する必要は、「名誉ではなく重責」をモットーとし、王冠の上に乗る赤いライオンを描いた図像によって可視化されたのである(図7)。⁽⁷⁶⁾



図7 王冠の上に乗る赤ライオン
A. R Young (ed.), *Henry Peacham's Manuscript Emblem Books*, p. 205.

第四章 歴史と統治のアート

以上のように、ヘンリーの君主教育は、伝統的な「君主の鑑」論だけでなく、式典や仮面劇、あるいはエンブレムを通じて視覚的にも行われた。その一方で、ジョンソンの戯曲やピーチャムの図像、そして『バシリコン・ドロン』の末尾で言及された統治のアートについても様々な形を通じて助言がなされた。たとえば、ヘンリーの財務官であったチャールズ・コーンウォリスは、「キリスト教世界のすべての君主国とコモンウェルスの視線と関心」を集めるようになったヘンリーに対し、「統治を可能にするあらゆる事柄」に取り組み、宗教に配慮し、「今後統治することになる複数の国民に平等に愛情を向けること」を助言する。コーンウォリスはまた、「権威」と「敬意」の重要性を指摘しながら、「王や君主は生まれながらの「主権者」であるが、「人々の善と奉仕のために定められている」ことを強調した⁽⁷⁶⁾。そして、ヘンリーは実際に、これに感謝する手紙を書き、コーンウォリスにさらなる助言を求めたのである⁽⁷⁷⁾。

また、一六〇七年に法務次官に就任していたベイコンも助言者の一人であり、彼は『政治道徳論集』の第二版(一六一二)を当初はヘンリーに献呈する予定であった。しかも、エッセイ形式を用いたこの作品において、ベイコンは政治の「秘密や秘儀」を「寓意や比喩」に包んで助言する⁽⁸⁰⁾。それゆえ、たとえば第二版に収録されたエッセイ「助言について」のなかで彼は、国王と助言が一体であることや顧問会議の利用法についての「帝国の秘密」を、ユピテルが助言を意味するメティスと結婚し、思慮と権力を意味するパラスを産んだ神話を用いて説明した⁽⁸¹⁾。このユピテルが頭からパラスを産んだ場面は、『ブリテンのミネルヴァ』において、知識を実践するアートの重要性を示すものとしても描かれている(図8⁽⁸²⁾)。また、「帝国について」では、



図8 ユピテルの頭部から産まれるパラス
Peacham, *Minerva Britanna*, p. 188.

善政と悪政の違いや権力の恣意的な行使の問題が、暴君ネロが弾いた豎琴の調弦に喩えて説明された。そして、神に對する王の二重の義務を述べたジェイムズと同様に、ベイコンもまた、国王に関するすべての教訓は、国王が「人間であること」と「神の代理であること」を忘れないことに含まれるとする。しかも、それらは専制権力を正当化するものではなく、逆に君主の権力と意志を「拘束する」のである。⁽⁸³⁾

もつとも、先にも述べたように、『バシリコン・ドロン』において、統治のための「すべての技」を学ぶヘンリに助言されたのは、聖書や法とともに、「経験を理論で学ぶ」ことができる歴史に「精通する」ことであった。ピーチャムの『ブリテンのミネルヴァ』やMS Royalにおいて「運命の輪」として描かれた歴史からは、人間の有為転変や歴史の教訓だけでなく、外国の大使や異邦人と対話する際にも有用な諸外国の事情を知ることができる。なかでも「軍事の実践と教則の双方において遙かに傑出している」としてジェイムズが推薦したのがカエサルの『ガリア戦記』であった。⁽⁸⁴⁾ これを受けて、のちに枢密院の書記となるクレメント・エドモンズによる『ガリア戦記』の翻訳（一六〇四、〇九）はヘンリに献呈された。⁽⁸⁵⁾ そして、コーンウォリスによれば、ヘンリは文武に励むなかで、乗馬やテニス、軍事に役立つ数学などに加え、文治 government civil の知識を得るために、「現在の事柄について判断し、未来の事柄を防ぐ」ことに大きく寄与する過去の事柄についての知識」である歴史に時間を割いたという。⁽⁸⁶⁾

初期近代のヨーロッパにおいて、歴史は、統治の指針となる政治的な思慮の宝庫であった。また、とくに一六世紀後半以降の宮廷社会では、カエサルや、あるいはトウキユディウスやポリビウス、リウイウス、プルタルコスなどに加えて、タキトゥスが広く読まれたことが知られている。⁽⁸⁷⁾ タキトゥスは『エンブレム集』の著者アルチャーティによる注釈などを経て、オランダの人文主義者リプシウスが編集した全集（一五八一）によって普及した。イングランドでもヘンリ・サヴィルによる『同時代史』と『アグリコラ』の英訳（一五九二）やリチャード・グリーンウエイによる『年代記』の英訳（一五九八）が出版され、第二代エセックス伯のサークルを中心に受容された。⁽⁸⁸⁾ エセックス宛のグリーンウエイ

の献辞によれば、歴史は「思慮の母である経験の女主人」であり、タキトウスは「最善のなかでの筆頭」になりうるのである。⁸⁸⁾そして、このエセックスが反乱の廉で処刑された後、彼の息子の第三代エセックス伯を含むサークルの面々が再び集ったのがヘンリーの宮廷であった。

もともと、第二代エセックス伯と対抗したセシル家の子弟も「宮廷のカレッジ」に含まれていたことに示されるように、ヘンリーの宮廷は、ジェイムズに対する反乱の拠点になった訳ではない。また、タキトウスや他の古典だけでなく、リプシウスの『政治学六卷』やグエイツチャルデーニの『イタリア史』、そしてマキアヴェッリなどのルネサンス期の文献も政治的思慮の源泉として広く読まれていた。⁸⁹⁾しかし、そうしたなかで、ジョンソンは『年代記』における古代ローマの寵臣をタイトルにした戯曲『シジェイナス』を執筆し、ベイコンはタキトウスを「あらゆる歴史物語」のなかで「まさしく最良」とし、⁹⁰⁾ピーチャムはタキトウスを「歴史家のプリンス」と呼んだ。⁹¹⁾そしてヘンリーもまた、タキトウスが思慮の宝庫とされていることを認識しつつ、『アグリコラ』の読解をめぐってハリントンと議論を交わしたのである。⁹²⁾

ヘンリーの宮廷における、このタキトウスをはじめとする歴史への関心は、エセックス・サークルの一員であったジョン・ヘイワードにも看取することができる。ローマ法学者でもあるヘイワードは以前、リチャード二世の廃位を扱った『ヘンリー四世史』(一五九九)によってエリザベスの怒りを買っていた。しかし、ヘイワードはその後、「イングラント史の多くに不満を抱き」、「以前の時代が無視されていることを非難した」ヘンリーとの会話に触発されて『三人のノルマン人君主の生涯』(一六二三)を執筆したのである。⁹³⁾ヘイワードによれば、この作品は「美德の範例」や「イングラント帝国の基礎」である先王の事績を示すものであるが、歴史そのものが皇太子に「最も適した主題」である。なぜなら、「偉大な人物の行為を精査し、そのすべての背景を考察し、実際の出来事と助言の内容や対処の仕方を比較することによって」、「人はあらゆる時代に生き、あらゆる事業に居合わせ」、それとともに「判断がより強く確かとなり、より大きな経験を手に入れることができる」⁹⁴⁾からである。

もつとも、歴史から導き出される統治のアート、あるいは政治的な思慮は、個別具体的な状況に対応するため一般的な規則にはなりにくい。たとえばコーンウォリスによれば、人間や気質、事件、時期や季節などの多様性のために助言の内容は変化を余儀なくされる。それゆえ、「熟練した船乗りはしばしば、彼が目指した航路に必ずしも沿うのでなく、吹く風に応じて船を操縦する *governeth*」のである。⁽⁷⁷⁾ そのため、たとえばリプシウスの『政治学六卷』やベイコンの『政治道徳論集』、あるいはグイッチャルディーニの『リコルデイ』などでは、体系的な記述ではなく、古典からの引用やエッセイ、そしてアフォリズムといった断片的な叙述形式が用いられた。⁽⁹⁸⁾ しかも、ベイコンによれば、体系的な記述は「同意や信用を得るには適している」が、「行動を指示するには適していない」。これに対して、アフォリズムのような断片的な知識は「いつそうふかく研究するようにと人びとをいざなう」のである。⁽⁹⁹⁾ そして、このような観点から見逃せないのが、ヘンリとチャールズの双方に海外事情の助言者として仕えたロバート・ダーリントンの『アフォリズム集』（一六一三）である。⁽¹⁰⁰⁾

ダーリントンは当初、エセックス・サークルの一員であったルトランド伯に仕えていたが、その後、家庭教師として随行したイタリアやフランスの国土や統治の形態を記した『フランスの眺望』（一六〇四）や『トスカナの概観』（一六〇五）を執筆した。⁽¹⁰¹⁾ この当時、外国旅行はジェントルマン教育の仕上げとされ、たとえばクリーランドの『若い貴族の学院』によれば、それは「真の政治学」であり、「あらゆる統治の善き学校」であるとして推奨されていた。⁽¹⁰²⁾ それゆえ、『フランスの眺望』を翌年に改題した『旅行の方法』（一六〇五）のタイトルが示すように、ダーリントンの作品は実際に旅行案内として読まれ、ピーチャムは『完全なジェントルマン』のなかでそれを「誠実なベン」によるものとして称賛した。⁽¹⁰³⁾ また、『トスカナの概観』のなかでは、フィレンツェについて、ダンテやペトラルカ、ボッカッチョ、あるいはマキアヴェッリやグイッチャルディーニ、ミケランジェロらが活躍した時代と比べ、現在ではトスカナ大公の専制的な統治のもとで、絵画と詩を除いた他の学芸や技芸が衰退していることが指摘される。⁽¹⁰⁴⁾ そして、このような海外の知識

や経験をもとにヘンリーの宮廷に入ったダーリントンには、グイッチャルディーニの『イタリア史』をもとに、タキトウスなどの古典からの多くの引用を加えた『アフォリズム集』(二六一三)を編んだのである(図9)。彼はまた、この作品を出版する前の一六〇九年に、その草稿をヘンリーに献呈したが、そこには「歴史の書物」は「黙せる主人」であると記されていた⁽¹⁶⁾。

この『アフォリズム集』は、ダーリントンによれば同時代の政治、哲学、歴史の書物の方法を統合した作品であり、二五〇近いアフォリズムと古典からの引用、そして『イタリア史』からの実例で構成される。それにより、為政者の経験や兵士の実践、学者の読書に見合う議論がなされ、大部の書物を紐解く時間がない君主にも有用な助言が行えるのである⁽¹⁷⁾。なかでも、第三巻のアフォリズム一六では、キケロやタキトウス、あるいはリプシウスからの引用や、ポローニャのペンティヴオーリオの事例から、マキアヴェツリを思わせるような、君主の偽装や悪徳を容認する次のような考察が示された。すなわち、心の中の考えが表に出ている人物は「顧問会議の席」には向いていない。なぜなら「公的な仕事」がなされる劇場においては、平時であれ戦時であれ、アクターは必ず仮面を被り、あらゆる場面に応じて仮面を変えなければならぬ」からである。したがって、君主は「国家の一般的な善や安全」のために、「平坦な小道や踏み固められた道」ではなく、あえて「使われていない脇道」に降りることもありうるのである⁽¹⁸⁾。

このような政治における偽装や悪徳の問題は、マキアヴェツリの名とともに、統治の秘密をめぐる大きな議論を惹き起こした。たとえばベイコンは、タキトウスを参照し



図9 ダーリントン『アフォリズム集』(1613)表紙

ながら、アウグストゥスにおける「術策もしくは政治 arts or policy」と暴君ティベリウスの「隠蔽」を區別し、「国家の術 arts of State」とは何を秘密にし、誰にいつ、どの程度明らかにするのかを見極めることにあるとした。⁽⁸⁶⁾ また、そのタキトゥスは、たとえば『年代記』において、「大がかりの見せしめを目的とする罰は、常になんらかの不正を伴う」が「個人のこうむる損害は、公共の福祉でもって償われるのである」と述べていた。⁽⁸⁷⁾ さらに、リプシウスは『政治学六卷』のなかで、欺瞞が混じった「不純な思慮」を条件付きで容認する。彼によれば、水で割ったワインのように、「欺瞞の水滴が少々混じっても思慮は思慮である」。さらに、この世はプラトンの理想国家ではないのであり、「率直で素朴な人物」は「この劇場には向かない」。⁽⁸⁸⁾ そして、ダーリントンは先に紹介したアフォリズム一六のなかで、このタキトゥスとリプシウスの一節を実際に引用し、将来の君主への助言の効果を高めていたのである。

おわりに

以上のように、ブリテンの皇太子ヘンリ・ステュアートの君主教育においては、ジェイムズの『パシリコン・ドロン』をはじめとして、伝統的な「君主の鑑」論だけでなく、洗礼式や叙任式、仮面劇、エンブレム、アフォリズムといった視覚的・言語的なアートが複合的に駆使され、人文主義的な教養の涵養が目指されていた。そこではまた、ジョンソンやピーチャムなどに見られるように、古代の英雄やローマ皇帝、ブリテンの伝説や中世以来の騎士道といった理想の君主をめぐる複数の言説が目にも鮮やかに展開されていた。しかも、その一方では、ヘイワードやダーリントンなどに見られるように、タキトゥスなどを通じて歴史を振り返ることにより、スコットランドやアイルランドを含めたブリテンの統治を可能にするための政治的な思慮、あるいは統治のアートが説かれていたのである。

もつとも、この裏側(あるいは表側)では常に、反カトリック・反スペインの戦闘的なプロテスタント君主を求める声が常に上がっていた。また、理想の君主像は一樣ではもちろんなく、相互に対立や矛盾の契機を有し、「平和の君主」であるとともに「学識ある」君主とされたジェイムズとの相違も見られた。また、とくに偽装や悪徳を一部容認するタキトウスやマキアヴェッリの影響は引き続き強く警戒された。それゆえ、コーンウォリスによる回想でも、「類まれな高潔さと思想の清らかさ」を有したヘンリが、「ライオンとキツネの皮」を被ることなく、「追従と隠蔽を嫌悪」する「真の王者の性格」であったことが強調されたのである。¹¹⁾

とはいえ、これらの相違や緊張を内包した議論の広がりやむしろ、将来の「ヘンリ九世」に対する期待の大きさを示したものとも言えるだろう。彼をめぐる君主論と統治論にはそれゆえ、王権と宮廷を中心とした同時代の政治の実態と、絶対主義のステレオタイプには還元されない理想の君主像や統治のヴィジョンがともに反映された、モナーキズムの一つの「絵巻」を観察することができる。その意味で、古典や歴史、あるいは詩や雄弁などに加え、式典や演劇や図像といった多彩なアートの活用は、人間の理性や抽象的な理論だけでなく、感情や感覚、あるいは想像力にも訴える王権の思想史の強みを物語っている。

しかし、一六一二年一月六日、グレイト・ブリテン帝国の将来を担うとされたヘンリは、わずか一八歳にして腸チフスにより急逝する。このことは、「正統」な王位継承者の安定的な確保という世襲の王権に常に内在する問題を、ステュアート王家もまた免れては示すものであった。この突然の悲劇を受けて、その早過ぎる死を嘆く声がブリテンの内外に満ちた。こうしたなか、たとえばダーリントン¹²⁾は、ヘンリの宮廷が「アカデミー」であったことを称賛しつつ、彼に献呈した『アフォリズム集』の草稿を「学問と学者に対する彼の愛情の記念碑」としたのである。¹³⁾

とはいえ、翌年に出版された『アフォリズム集』がヘンリより七歳下の弟チャールズに献呈されたことは、これまでヘンリの影に隠れていた、もう一人の新たな政治的なアクターの登場を告げるものでもあった。それゆえ、ダーリント

ンは、のちのチャールズ一世に宛てて、「すべての眼が貴方の上にある」としつつ、兄のヘンリを「模範」とするよう
に訴えた¹⁶⁾。また、後の一六四一年に出版されたコンウォリスの回想では、さらにもう一人の、将来のチャールズ二世
に対しても同様に、「すべての人の眼が貴方の上にある」として、「真の王者の性格」を有した伯父のヘンリの「真の継
承者」となることが求められた¹⁷⁾。そして、内乱に突入した一六四二年には、ヘンリに贈られたローリの作品という触れ
込みで、「国家のマキシム」を副題として統治のアートを論じる『君主論』が出版され、一七世紀の後半に何度も版を
重ねたのである¹⁸⁾。

このようにして、初期ステュアート朝における、人文主義的な教養を有した君主の再生という課題は兄のヘンリから
弟のチャールズ一世、さらには甥のチャールズ二世へと引き継がれた。むしろ、これらの継承の行方は別の物語となる。
しかし、その後の内乱や「王殺し」を経てもなお、王権と君主の「ルネサンス」は繰り返され、王政復古へと至るので
ある。

(1) たとえば、R. M. Smuts (ed.), *The Oxford Handbook of the Age of Shakespeare* (Oxford University Press, 2016). また、複合
国家に関する最近の共同研究として、岩井淳・竹澤祐文編『ヨーロッパ複合国家論の可能性——歴史学と思想史の対話』『ミネル
ヴァ書房』、二〇二二年。

(2) 国内の研究例として、小林麻衣子『近世スコットランドの王権——ジェイムズ六世と「君主の鑑」』ミネルヴァ書房、二〇一四年。
木村俊道『想像と歴史のポリテイクス——人文主義とブリテン帝国』風行社、二〇二〇年。

(3) モナーキズムに関する近年の研究例として、Cesare Cutica and Glenn Burgess (eds.), *Monarchism and Absolutism in Early
Modern Europe* (Pickering & Chatto, 2012). 同時代の宮廷文化については、たとえば Smuts, *Court Culture and the Origins of
a Royalist Tradition in Early Stuart England* (University of Pennsylvania Press, 1987). L. L. Peck (ed.), *The Mental World
of the Jacobean Court* (Cambridge University Press, 1991). Kevin Sharpe and Peter Lake (eds.), *Culture and Politics in Early
Stuart England* (Macmillan, 1994). D. L. Smith (ed.), *Monarchy and Politics in Early Stuart England* (Macmillan, 1994). D. L. Smith, *Constitutional
Stuart England* (Macmillan, 1994). D. L. Smith, *Monarchy and Politics in Early Stuart England* (Macmillan, 1994). D. L. Smith, *Constitutional
Stuart England* (Macmillan, 1994).

- Royalism and the Search for Settlement, c. 1640-1649 (Cambridge University Press, 1994). Jason McElligott and D. L. Smith (eds.), *Royalists and Royalism during the English Civil Wars* (Cambridge University Press, 2007). McElligott and Smith (eds.), *Royalists and Royalism during the Interregnum* (Cambridge University Press, 2010). 木村、ヨーロッパ史研究における近年の研究例について、Robert von Friedeburg and John Morrill (eds.), *Monarchy Transformed: Princes and Their Elites in Early Modern Western Europe* (Cambridge University Press, 2017)。
- (4) たなか、木村『標榜と歴史のホリチーミング』第三、四章。
- (5) Roy Strong, *Henry Prince of Wales and England's Lost Renaissance* (1986; Pimlico, 2000)。
- (6) E. C. Wilson, *Prince Henry and English Literature* (Cornell University Press, 1946). J. W. Williamson, *The Myth of the Conqueror. Prince Henry Stuart: A Study of 17th Century Personation* (AMS Press, 1978). Graham Parry, *The Golden Age Restored: The Culture of the Stuart Court, 1603-42* (Manchester University Press, 1981), ch. 3. 近年のぐんり研究の集成として、Timothy Wilks (ed.), *Prince Henry Revisited: Image and Exemplarity in Early Modern England* (Southampton Solent University / Paul Hoberton Publishing, 2007)。木村、ナット・ナ・キートン・キートンリーの展示と連動したCatharine MacLeod et al., *The Lost Prince: The Life & Death of Henry Stuart* (National Portrait Gallery, 2012) ぐんりの多様なイメージを視覚的に理解するため不可欠である。
- (7) Aysha Pollnitz, *Princely Education in Early Modern Britain* (Cambridge University Press, 2015)。Idem, 'Humanism and the Education of Henry, Prince of Wales' in Wilks (ed.), *Prince Henry Revisited*, pp. 22-64.
- (8) Michael Ulliyot, 'James's Reception and Henry's Receptivity: Reading *Basilicon Doron* after 1603', in Wilks (ed.), *Prince Henry Revisited*, pp. 65-84.
- (9) Smuts, 'Cultural Diversity and Cultural Change at the Court of James I', in Peck (ed.), *The Mental World of the Jacobean Court*, pp. 99-112。シトヤムストウグンリの関係について、これらポストロンンがごめい画者の対立が強調されたが、近年のぐんりの見直しがなされている。Pollnitz, 'Humanism and the Education of Henry', Ulliyot, 'James's Reception and Henry's Receptivity'。
- (10) これらのノートを含め、広く同時代の政治文化に着目した研究の例として、Kevin Sharpe, *Remapping Early Modern England: The Culture of Seventeenth-Century Politics* (Cambridge University Press, 2000)。Idem, *Image Wars: Promoting Kings and Commonwealths in England 1603-1660* (Yale University Press, 2010)。レポート集『Queen Skinner, Hobbes and the Humanist Frontispiece', in Skinner, *From Humanism to Hobbes: Studies in Rhetoric and Politics* (Cambridge University Press, 2002)。

Press, 2018), ch. 10 (pp. 222-35). なお、政治哲学と画像学を繋ぎ合わせた「哲学的画像学」の必要を指摘したアガンベンによれば、「今日の私たちはその最も基礎的な諸原則すら手にしていない」。ジョルジュ・アガンベン『スタシス—政治的パラダイムとしての内戦』高桑和巳訳、青土社、二〇一六年、五四—五六頁。

- (11) Morrill, 'Dynasties, Realms, Peoples and State Formation, 1500-1720', in Friedeburg and Morrill (eds.), *Monarchy Transformed*, pp. 17-43.

(12) なお、同じで言う「アート」artは多義的であり、本稿の範囲内でも①教養や学芸、②技術や技芸、③芸術などの意味がある。もっとも、一九世紀以降は「科学」scienceの台頭とともに①の意味が薄れ、さらに②と③に分化するが、それ以前は①②③の意味は重なり合っていた。本稿の副次的な目的の一つは、このような、初期近代における人文主義的な教養、統治の技術、そして視覚芸術や言語操作との連環を示すことにある。それゆえ、本稿では「アート」の意味をとくに区別せずに用いている。このような「アート」artへの教養については、木村『文明と教養の〈政治〉——近代デモクラシー以前の政治思想』講談社、二〇一三年。

- (13) William Fowler, *A True Reportarie of the Baptisme of the Prince of Scotland*, 30 August 1594, (ed.), Michael Ulliot in Elizabeth Goldring et al., (general eds.), *John Nichols's The Progresses and Public Processions of Queen Elizabeth I: A New Edition of the Early Modern Sources*, vol. 3, 1579-1595 (Oxford University Press, 2014), pp. 742-764. Rick Bowers, James VI, Prince Henry, and *A True Reportarie of Baptism at Stirling 1594, Renaissance and Reformation / Renaissance et Réforme*, vol. 29, no. 4 (2005), pp. 3-22.

(14) Fowler, *A True Reportarie of the Baptisme*, pp. 752, 744.

(15) Bowers, 'James VI, Prince Henry, and *A True Reportarie of Baptism*', pp. 3, 19.

(16) Alessandra Petrina, *Machiavelli in the British Isles: Two Early Modern Translations of The Prince* (Ashgate, 2009). Idem, 'The Travels of Ideology: Niccolò Machiavelli at the Court of James VI', *Modern Language Review*, vol. 102, no. 4 (2007), pp. 947-959.

(17) King James VI and I, *Political Writings*, (ed.), J. P. Sommerville (Cambridge University Press, 1994), pp. 1, 3.

(18) Thomas Birch, *The Life of Henry Prince of Wales, Eldest Son of King James I* (London, 1760), p. 25.

(19) 家庭教師であったフキヤナンを後に強く批判したジェイムズとは異なり、ヘンリーと教師たちが「稀な天才であるが」極めて好ましい関係を保った「フキヤンロン」は記している。Francis Bacon, 'In Henricum Principem Walliae: Elogium Francisci Baconi', in *The Works of Francis Bacon*, vol. 6, (eds.), James Spedding, R. L. Ellis, and D. D. Heath (1858; Cambridge, 2011), pp. 324, 328. なお、ニュートンはヘンリーの死後、チャールズにも仕えた。ニュートンはまた、ホルバイン作のエラスムスの肖像画を所有していたが、彼はそれをどちらかの「王子」に贈っている。Strong, *Henry Prince of Wales*, p. 14.

- (20) Birch, *The Life of Henry Prince of Wales*, p. 97.
- (21) James Cleland, *Hero-paideia or the Institution of a Young Noble Man* (Oxford, 1607), p. 83. 「英雄の教育」をタイトルで謳ったチャールズに献呈された『若く貴族の学院』の各巻はそれぞれ「ニュートンやハリントン」・「エセックス伯とつたヘンリーの「アカデミー」の面々に捧げられた」。この作品はまた、後に *The Scottish Academie* (London, 1611) や *The Instruction of a Young Noble-man* (Oxford, 1612) などでも再版された。
- (22) King James VI and I, *Political Writings*, pp. 44, 46.
- (23) Henry Peacham, *Minerva Britanna or a Garden of Heroical Divises* (London, 1612), A2^r. ヘンリーの「学問や詩神」・「ユース」・何であれ卓越した才の学者に対する愛」・「ユース」 Charles Cornwallis, *The Life and Death of Our Late Most Incomparable and Heroique Prince, Henry Prince of Wales* (London, 1641), p. 97. 44-45 の作品の著者はローン・マケリスではなく、ジョン・ホーキンスとされたことが、近年はそれを疑問視されている。 Macleod et al., *The Lost Prince*, p. 176.
- (24) Bacon, 'In Henricum Principem Walliae', pp. 324, 328.
- (25) Birch, *The Life of Henry Prince of Wales*, pp. 75-76.
- (26) Strong, *Henry Prince of Wales*, pp. 89, H. F. Brown (ed.), *Calendar of State Papers and Manuscripts, Relating to English Affairs, Existing in the Archives and Collections of Venice, and in Other Libraries of Northern Italy*, vol. 10, 1603-1607 (London, 1900: Kraus Reprint, 1970), p. 513. 当時のマヘンヌア大使によれば、ヘンリーはまだ「彼よりも学智に秀でているとされたチャールズに比べて」「もし我が弟に彼らが言う程の学識があれば、彼をカンタベリー大主教にするであろう」と述べたとされる。ヴェネツィア大使は続けて「これを快く思わなかったジェイムズが人気のあるヘンリーに対して」「率直に言えば、嫉妬を募らせているであろう」ため、「彼の歩みを導く賢明な助言者を強く必要としている」と報告した (pp. 513-514)。
- (27) ちいさな後のヘンリーの君主教育を自己成型にしているのは、Palnitz, *Princely Education*, pp. 348-350. Idem, 'Humanism and the Education of Henry', pp. 49-52. ホルヒッツは「1609年1月1日付の草稿」(Oratio serenissimi principis ad regem; British Library, Harleian MS 7007) に着目し「哲学と雄弁、政治学、歴史の重要性をヘンリーが認識していたことを明らかにしている」。
- (27) Daniel Price, *Prince Henry His First Anniversary* (Oxford, 1613), p. 4.
- (28) Wilks, 'Poets, Patronage, and the Prince's Court', in Smuts (ed.), *The Oxford Handbook of the Age of Shakespeare*, pp. 159-178.
- (29) J. A. Buchtel, "To the Most High and Excellent Prince: Dedicating Books to Henry, Prince of Wales", in Wilks (ed.), *Prince Henry Revived*, pp. 104-133.

- (36) Homer, *Homer Prince of Poets: Translated according to the Greeke, in Twelve Bookes of His Iliads*. (tr.). George Chapman (London, 1609). Homer, *The Iliads of Homer Prince of Poets*. (tr.). Chapman (London, 1611). Homer, *The Whole Works of Homer, Prince of Poets in His Iliads, and Odyssees*. (tr.). Chapman (London, 1616). Gilles Bertheau, 'Prince Henry as Chapman's 'Absolute Man'', in Wilks (ed.), *Prince Henry Revisited*, pp. 134-145.
- (37) Michael Drayton, *Poly-Olithon* (London, 1612).
- (38) Walter Raleigh, *The History of the World* (London, 1614). The Preface, E4. オープリーの『名士小伝』には、ローリは「ロリの「一番のお気に入り」とあり、「王子が父王より長生きしてつづれてきたら、彼はつぎつぎに養美を与えられて、たちまち高位に昇りつめていたろう」とある。オープリーの『名士小伝』橋口稔・小池銚訳『富山房百科文庫』一九七九年、一七七頁。『ロリ』の政治的・文学的な動機については、A. R. Beer, 'Left to the World without a Maister': Sir Walter Raleigh's *The History of the World* as a Public Text, *Studies in Philology*, vol. 91 (1994), pp. 452-463. Idem, *Sir Walter Raleigh and His Readers in the Seventeenth Century: Speaking to the People* (Macmillan, 1997), pp. 22-31.
- (39) George More, *Principles for Young Princes* (London, 1611), fols. 1-2, 54r '王政の政治』の概念は「五世紀の法家李膺、マ・ノ・ノオーネスキエーの議論に類す」。
- (40) King James VI and I, *Political Writings*, p. 61.
- (41) King James VI and I, *Political Writings*, pp. 4, 49.
- (42) [Samuel Daniel?], *The Order and Solemnitie of the Creation of the High and Mighty Prince Henrie* ([London], 1610). E. R. Foster (ed.), *Proceedings in Parliament, 1610*, vol. 2 (Yale University Press, 1966), pp. 95-98.
- (43) [Daniel?], *The Order and Solemnitie of the Creation*, A4^r-B^v.
- (44) Richard Connak, *A Collection of the Names of This Kingdom of England* (London, 1747), B1^r. Idem, *An Account of the Prince of Wales, from the First Institution till Prince Henry, Eldest Son to King James I* (London, 1751), Dedication.
- (45) Pauline Croft, 'The Parliamentary Installation of Henry, Prince of Wales', *Historical Research*, vol. 65, issue 157 (1992), pp. 177-193.
- (46) Strong, *Henry Prince of Wales*, p. 52. Croft, 'The Parliamentary Installation of Henry', p. 181.
- (47) Croft, 'The Parliamentary Installation of Henry', p. 192. 『ロリ』の儀式の過程に「シャインズ・アンド・メン・オブ・ザ・キング」を添えて読む。
- (48) Strong, *Henry Prince of Wales*, pp. 114-116.
- (49) ロイ・ストロング『ルネサンスの祝祭——王権と芸術（上・下）』星和彦訳、平凡社、一九八七年。
- (50) タムズバタ Martin Butler, *The Stuart Court Masque and Political Culture* (Cambridge University Press, 2009). Parry, 'The

- Politics of the Jacobean Masque', in J. R. Mulryne and Margaret Shewring (eds.), *Theatre and Government under the Early Stuarts* (Cambridge University Press, 1993), pp. 87-117.
- (44) Ben Jonson, *The King's Entertainment*, (ed.), Martin Butler, in *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, vol. 2 (Cambridge University Press, 2012), p. 432, 460.
- (45) シムオンズ期のシムオンズ・ワードン Blair Worden, 'Ben Jonson and the Monarchy', in R. H. Wells et al., (eds.), *Neo-Historicism: Studies in Renaissance Literature, History and Politics* (D. S. Brewer, 2000), pp. 71-90. R. C. Evans, 'Seignus: Ethics and Politics in the Early Reign of James', in Julie Sanders et al., (eds.), *Refashioning Ben Jonson: Gender, Politics and the Jonsonian Canon* (Macmillan, 1998), pp. 71-92. Butler, 'Ben Jonson and the Limits of Courtyly Panegyric', in Sharpe and Lake (eds.), *Culture and Politics in Early Stuart England*, pp. 91-115. シムオンズ・スコット 'シムオンズの共和主義的側面を強調する議論の例として' Tom Cain, 'Jonson's Humanist Tragedies', in A. D. Cousins and A. V. Scott (eds.), *Ben Jonson and the Politics of Genre* (Cambridge University Press, 2009), pp. 162-189.
- (46) Jonson, *The Masque of Queens*, (ed.), David Lindley, in *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, vol. 3 (Cambridge University Press, 2012), p. 304.
- (47) シムオンズ強調する議論として Strong, *Henry Prince of Wales*, pp. 8-9, 103-113, 122-128. Parry, 'The Politics of the Jacobean Masque', シムオンズ 'シムオンズ対立を調停し「多様な真理」を保つためのシムオンズは「ネオローダ」decorumに着目した議論として' Scott, 'The Jonsonian Masque and the Politics of Decorum', in Cousins and Scott (eds.), *Ben Jonson and the Politics of Genre*, pp. 43-72, esp. pp. 43, 46-47, 53.
- (48) Jonson, *The Speeches at Prince Henry's Barriers*, (ed.), Lindley, in *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, vol. 3 pp. 537-538.
- (49) Jonson, *Oberon, the Fairy Prince*, (ed.), Lindley, in *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, vol. 3, pp. 711-743, シムオンズはまた 'ブリテン諸王と妖精の帝王の系譜を物語ったシムオンズ『妖精の女王』(二五九〇・九六)の第二巻第一〇篇ではシムオンズ八世になぞらえられていた。スベンサー『妖精の女王2』和田勇一・福田昇八訳、ちくま文庫、二〇〇五年、七九頁。
- (50) Parry, *The Golden Age Restor'd*, p. 74.
- (51) Jonson, *The Speeches at Prince Henry's Barriers*, pp. 530-531, 535-536.
- (52) Bacon, *The Advancement of Learning*, in Michael Kieman (ed.), *The Oxford Francis Bacon*, vol. 4 (Clarendon Press, 2000), p. 120 (シムオンズ『学問の進歩』服部英次郎・多田英次訳、岩波文庫、一九七四年、二三四頁)。シムオンズは『政治道徳論集』のなか

- に、「かかるまじめな論議の中へ入れると、つまらないものにすぎない」としつつ、仮面劇に関するエッセイを収録した。Bacon, *The Essays or Counsels, Civil and Morall*, in Kiernan (ed.), *The Oxford Francis Bacon*, vol. 15 (1985; Clarendon Press, 2000), p. 117 (ユーロン『ユーロン随想集』渡辺義雄訳、岩波文庫、一九八三年、一七〇頁)。
- (73) Michael Bath, *Speaking Pictures: English Emblem Books and Renaissance Culture* (Longman, 1994), p. 90.
- (74) A. R. Young, *Henry Peacham* (Wayne Publishers, 1979). John Horden, 'Peacham, Henry', in H. C. G. Matthew and Brian Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, vol. 43 (Oxford University Press, 2004), pp. 236-238.
- (75) Henry Peacham, *The Compleat Gentleman* (London, 1622), A4^r, ch. 2.
- (76) Peacham, *The Compleat Gentleman*, A4^r-B2^r.
- (77) 『完全なジェントルマン』の表題頁には、「高貴」nobilitasの像の上に様々な武器や武具が、「学問」scientiaの像の上に天球儀、物差し、コンパス、曲尺、パレットと絵筆、楽器、そしてプルトルコスとトゥキユディテス、タキトゥスの名が記された書物が描かれている。M・コーベット、R・W・ライトバウン『寓意の扉——マニエリスム装飾表題頁の図像学』篠崎実他訳、平凡社、一九九一年、第一四章。
- (78) Peacham, *The Compleat Gentleman*, pp. 79-80.
- (79) Peacham, *The Compleat Gentleman*, pp. 8, 43-44. しかも、この雄弁の技法は、同名のピーチャムの父ヘンリによって、すでに書物にまとめられていた。そして、この父ヘンリの『雄弁の庭園』(一五七七、九三)においても同様に、雄弁によって「深遠な理解、秘密の助言、知恵のある政治的考察」が「最も効果的に表現され、最も美しく装われる」とされた。彼によれば、そうした弁舌と知恵を兼ね備えた者は、「世界を助言により、地方を法により、都市を政治により、群衆を説得により支配する」のである。Henry Peacham, *The Garden of Eloquence* (1577; London, 1593), ABiii^v.
- (80) Peacham, *Graphice or the Most Ancient and Excellent Art of Drawing and Limning* (London, 1612), A3^v, p. 2; *The Compleat Gentleman*, p. 104.
- (81) Peacham, *Graphice*, p. 3; *The Compleat Gentleman*, p. 105.
- (82) Peacham, *Graphice*, pp. 25-26.
- (83) エンブレムについての邦語・邦訳文献の例として、伊藤博明『縮想の表象学——エンブレムへの招待』ありな書房、二〇〇七年。
- ピーター・M・テイラー編『エンブレムの宇宙——西欧図像学の誕生と発展と精華』伊藤博明監訳、ありな書房、二〇一三年。カール・J・ヘルトゲン『英国におけるエンブレムの伝統——ルネサンス視覚文化の一面』川井万里子・松田美作子訳、慶應義塾大学出版会、二〇〇五年。

- (64) 伊藤「綺想の表象学」一五頁。
- (65) Bath, *Speaking Pictures*, p. 7. Young, *Henry Peacham*, ch. 2. もともと、ピーチャムも認識していたように、イングランドにおける、あるいは「イングランド人」によるエンブレム・ブックの出版は大陸に比べて遅く、「ブリテンのミネルヴァ」以前には、ライテンで出版されたホイットニーの『エンブレム選集』(一五八六)など僅かであった。Peacham, *Minerva Britanna*, A3^v.
- (66) Peacham, *Minerva Britanna*, A2^v. ピーチャムは後にまた、ハンリーの死を悼む詩 *The Period of Mourning* (London, 1613) や「ファルツ選帝侯フリードリヒ五世とハンリーの妹のエリザベスとの間に生まれた男子(ハンリー)を祝した『ハンリー王子の再生』 *Prince Henrie Revived* (London, 1615) を執筆した。
- (67) Peacham, *Minerva Britanna*, pp. 210-211. Bath, *Speaking Pictures*, pp. 91-93. Strong, *Henry Prince of Wales*, p. 28.
- (68) Peacham, *Minerva Britanna*, pp. 1, 11, 30, 31. ピーチャムによれば「シエインズもまた、若い頃にエンブレムの作成を楽しみ、大なる喜びを得ておられた」。 *Ibid.*, A3^v.
- (69) Peacham, *Minerva Britanna*, p. 17.
- (70) Bacon, *The Advancement of Learning*, p. 119 (『字問の進歩』一三三三頁)。オーブリー『名士小伝』二〇〇頁。
 ンの館の玄関には、柱廊のアーチ下にエンブレムが描かれていた。オーブリー『名士小伝』二〇〇頁。
- (71) プルタルコス『新訳アレクサンドロス大王伝——『プルタルコス英雄伝』より』森谷公俊訳、河出書房新社、二〇一七年。「ブリテンにはお前の居場所はない」というモットーは、荒馬のブークファラスを乗りこなしたアレクサンドロスに対してフィリップスが述べた「マケドニアにはお前の居場所がない」(五九頁)に由来する。
- (72) King James VI and I, *Political Writings*, p. 56.
- (73) ヤンツに よって編集された四つの手稿のうちの三つ (Bodleian Library: MS Rawlinson Poetry 146/ British Library: MS Harleian 6855, Art. 13/ British Library: MS Royal 12A LXVI) は『シンリロン・ケロン』のハンブレイト集である。Peacham, *Henry Peacham's Manuscript Emblem Books*, (ed.), A. R. Young (University of Toronto Press, 1998).
- (74) Peacham, *Henry Peacham's Manuscript Emblem Books*, pp. 233-234.
- (75) Peacham, *Henry Peacham's Manuscript Emblem Books*, p. 128. King James VI and I, *Political Writings*, p. 12. Bath, *Speaking Pictures*, p. 99.
- (76) Peacham, *Henry Peacham's Manuscript Emblem Books*, pp. 152-153, 180-181. King James VI and I, *Political Writings*, pp. 20-21, 46. 学者のハンブレイトのついでにマクドナルド、MacLeod et al., *The Last Prince*, pp. 80-81. このハンブレイトは、字問に通曉してこそ、それにのめり込み過ぎなところを強調される。

- (17) Peacham, *Henry Peacham's Manuscript Emblem Books*, p. 205. King James VI and I, *Political Writings*, p. 61.
- (18) [Charles Cornwallis], 'Advice to Prince Henry', in Connak, *A Collection of the Names of All the Princes*, pp. 61-63; *An Account of the Prince of Wales*, pp. 65-67.
- (19) Polnitz, 'Humanism and the Education of Henry', p. 53.
- (20) 下記の引用は、Bacon, *The Advancement of Learning*, p. 74 (『学問の進歩』一四九頁)。寓話や歴史、アフォリズムを駆使したインロンの政治学については、木村『顧問官の政治学——フランシス・ベイコンとルネサンス期イングランド』木鐸社、二〇〇三年。以下二章。
- (21) Bacon, *The Essays or Counsels*, p. 64 (『ヤーロハ随想集』九六頁)。
- (22) Peacham, *Minerva Britanna*, p. 188. Young, *Henry Peacham*, p. 50. 以下、當時法務次官であったインロンの『法の寓意』について(脚註)を刺す為の語を述べらる。Peacham, *Minerva Britanna*, p. 34. Cf. Peacham, *Henry Peacham's Manuscript Emblem Books*, pp. 27, 89, 154. James VI and I, *Political Writings*, p. 21.
- (23) Bacon, *The Essays or Counsels*, pp. 59, 63 (『ヤーロハ随想集』八九、九四頁)。
- (24) James VI and I, *Political Writings*, p. 46.
- (25) Clement Edmonds, *Observations upon Caesars Commentaries* (London, 1604; [London, 1609]), 一六〇九年版の表題頁にはカエサルに「*カエサル*」の肖像が描かれていた。ただし「*チャーヤ*」は「親友」にちなんでカエサルの記を称賛している。Peacham, *The Compleat Gentleman*, p. 46.
- (26) Cornwallis, *A Discourse of the Most Illustrious Prince, Henry* (London, 1641), p. 15. 以下「*ヘンリーの軍事のたゞに数学や詩*」は、藤原の語。
- (27) Peter Burke, 'Tacitism, Scepticism, and Reason of State', in J. H. Burns and Mark Goldie (eds.), *The Cambridge History of Political Thought, 1450-1700* (Cambridge University Press, 1994), pp. 479-498. Smuts, 'Court-Centred Politics and the Uses of Roman Historians, c.1590-1630', in Sharpe and Lake (eds.), *Culture and Politics in Early Stuart England*, pp. 21-43. Smuts, 'Varieties of Tacitism', *Huntington Library Quarterly*, vol. 83, no. 3 (2020), pp. 441-465.
- (28) J. H. M. Salmon, 'Stoicism and Roman Example: Seneca and Tacitus in Jacobean England', *Journal of the History of Ideas*, vol. 50, no. 2 (1989), pp. 199-225. Idem, 'Seneca and Tacitus in Jacobean England', in Peck (ed.), *The Mental World of the Jacobean Court*, pp. 169-188. Paula Kewes, 'Henry Savile's Tacitus and the Politics of Roman History in Late Elizabethan England', *Huntington Library Quarterly*, vol. 74, no. 4 (2011), pp. 515-551.

- (88) Tacitus, *The Annals of Cornelius Tacitus*, (tr.), Richard Greenway ([London], 1598), 'To the Right Honorable Robert Earle of Essex'.
- (90) たごえは、塚田富治『カメレオン精神の誕生——徳の政治から「キアヴェリスム」へ』平凡社、一九九一年。
- (16) Worden, Ben Jonson among the Historians, in Sharpe and Lake (eds.), *Culture and Politics in Early Stuart England*, pp. 67-89.
- (78) Bacon, Letter of Advice to Fulke Greville, in Alan Stewart with Harriet Knight (eds.), *The Oxford Francis Bacon*, vol. 1 (Clarendon Press, 2012), p. 210.
- (83) Peacham, *The Compleat Gentleman*, p. 46.
- (74) Birch, *The Life of Henry Prince of Wales*, pp. 121, 422.
- (45) John Hayward, *The Lives of the III. Normans, Kings of England* (London, 1613), A2^r.
- (96) Hayward, *The Lives of the III. Normans*, A4^r.
- (45) [Cornwallis], 'Advice to Prince Henry', in Connak, *A Collection of the Names of All the Princes*, p. 68; *An Account of the Prince of Wales*, p. 72.
- (86) 木村『顧問の政治学』巻11章° D. M. Jones, 'Aphorism and the Counsel of Prudence in Early Modern Statecraft: The Curious Case of Justus Lipsius', *Parergon*, vol. 28, no. 2 (2011), pp. 55-85.
- (86) Bacon, *The Advancement of Learning*, p. 124 (『勸学の樂談』11回111頁).
- (80) K. J. Hölftgen, 'Sir Robert Dallington (1561-1637): Author, Traveler, and Pioneer of Taste', *Huntington Library Quarterly*, vol. 47, no. 3 (1984), pp. 147-177. C. S. Knighton, 'Dallington, Sir Robert', in Matthew and Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, vol. 14 (Oxford University Press, 2004), pp. 968-969.
- (10) Robert Dallington, *The View of France*, (intro.), W. P. Barrett (London 1604; Oxford University Press, 1936); *A Survey of the Great Dukes State of Tuscany* (London, 1605; Theatrum Orbis Terrarum, 1974).
- (20) Cleland, *Hero-paideia*, p. 251. Peacham, *The Compleat Gentleman*, ch. 16.
- (20) Dallington, *A Method for Travell. Shewed by Taking the View of France* (London, 1605). Peacham, *The Compleat Gentleman*, p. 203.
- (10) Dallington, *A Survey of the Great Dukes State of Tuscany*, pp. 13, 39 (F4^r), 61-62.
- (20) Hölftgen, 'Sir Robert Dallington', pp. 164, 167, 170.

- (106) Dallington, *Aphorismes Civili and Militarie* (London, 1613), A4.
 (107) Dallington, *Aphorismes*, p. 176. ターリントンはまだ、他のアフォリズムズにおいて、キケロの『義務について』における誠実さと有益さをめぐる議論や、フランソワ王とピオンビーノの領主の事例を踏まえ、誠実さを重んじる道徳家と利益を優先する政治家との間にある「中間の道」を取るべきとした (p. 314)。Salmon, 'Stoicism and Roman Example', pp. 216-217; Salmon, 'Seneca and Tacitus', pp. 180-181. Pollnitz, 'Humanism and the Education of Henry', p. 53.
 (108) Bacon, *The Essays or Counsels*, p. 20 (『ヤーコン随想集』三四頁).
 (109) タキトゥス『年代記(下)』国原吉之助訳、岩波文庫、一九八一年、二一一頁(144)。
 (110) Justus Lipsius, *Politica: Six Books of Politics or Political Instruction*, (ed. and tr.), Jan Waszink (Royal van Gorcum, 2004), pp. 506-509, 518-519. Lipsius, *Six Books of Politikes or Civil Doctrine*, (tr.), William Jones (London, 1594; Theatrum Orbis Terrarum, 1970), pp. 114, 112, 117-118.
 (111) Cornwalis, *A Discourse*, p. 21.
 (112) Dallington, *Aphorismes*, A4^r. Hiltgen, 'Sir Robert Dallington', pp. 168, 171.
 (113) Dallington, *Aphorismes*, A3^v.
 (114) Cornwalis, *A Discourse*, A3^v, p. 21.
 (115) Walter Rawley, *The Prince, or Maxims of State* (London, 1642). この作品は『国家のマキシム』(一六五〇、五一、五六)として再版され、さらに『ローリ遺稿集』(一六五九、六一、六四、六九、八一)に再録された。ただし、ローリが作者であるかどうかは異論がある。